

岩手大学創立 70 周年記念事業
「グローバル人材で未来創造」国際シンポジウム 開催報告

岩手大学は、創立 70 周年記念事業の一環として「グローバル人材で未来創造」国際シンポジウム（アジアジョイントシンポジウム 2019 合同開催）を下記のとおり開催した。

【参加機関】

・海外協定校等：計 17 大学・機関

吉林農業大学、キングモンクット工科大学トンブリ校、キングモンクット工科大学ラカバン校、群山大学、サイアム大学、サスカチュワン大学、上海海洋大学、西北大学、全南大学、高雄師範大学、大連理工大学、中国社会科学院考古研究所、寧波大学、ハンバット大学、パンヤピワット経営大学、パハン大学、ロッテンブルグ大学

・その他

グローバルフェロー、国際交流コーディネーター、外国人卒業生

【参加者数】

・学長フォーラム：計約 100 名

・分科会：計約 483 名

- | | |
|-------------------------------------|---------|
| 1. グローバル社会で活躍するための外国語教育 | 計 96 名 |
| 2. SDGs の実現に向けた農学の貢献 | 計 183 名 |
| 3. 3次元計測点群処理による文化財解析 | 計約 30 名 |
| 4. AJS 分科会…金型鋳造分野における研究開発とグローバル人材育成 | 計 26 名 |
| 5. AJS 分科会…起業家人材育成とビジネスプラン | 計 23 名 |
| 6. AJS 分科会…平泉と長安—東アジアにおける庭園比較史 | 計 81 名 |
| 7. 外国人留学生同窓会設立 & 懇談会、新国際交流会館見学 | 計 44 名 |

【日程】

2019 年 11 月 13 日（水）～16 日（土）

11 月 13 日（水） 盛岡着・歓迎レセプション

11 月 14 日（木） 学長フォーラム、分科会、交流レセプション

11 月 15 日（金） 企業視察等、学部主催の研究交流レセプション

11 月 16 日（土） 盛岡発・帰国

【概要】

1. 11 月 13 日（水） 盛岡着・歓迎レセプション

国際課職員及び学生スタッフが盛岡駅とホテルにて出迎えを行い、海外からの参加者全員が無事盛岡に到着し、ホテルへチェックインした。

18:30 からホテル（メトロポリタン盛岡本館）にて歓迎レセプションが行われ、海外からの参加者のほか、岩手大学から岩渕学長、藪副学長、本シンポジウム部会メンバーらが出席した。



18:30-19:00 の間、レセプション会場において

海外参加者との事前ミーティングが行われ、岩渕学長から海外参加者へのお礼が述べられたほか、本シンポジウムの全体日程の紹介や海外から参加した大学・機関の紹介が行われた。

19:00 からは夕食を取りながら、本シンポジウム各分科会の担当者及びレセプション参加者間の交流を深めた。

2-1. 11月14日（木）9:00-12:00 学長フォーラム

場所：岩手大学理工学部銀河ホール



○ Opening remarks（挨拶）

1. 開催挨拶：岩渕 明岩手大学長

岩渕学長は、本シンポジウムの主催者として開会の挨拶を述べた。岩手大学は1949年に開学し、今年70周年を迎えている、岩手大学はGlocal (global + local)な大学作りを柱にグローバルな視点を持ちながら地域の課題に向き合うGlocalな人材の育成に力を入れている。

る、東日本大震災後は岩手の主要な大学として地域の再生（build back better）に取り組んでいると語った。

そして、Internationalization は文化の違いを知り尊重すること、Globalization は同じ価値観で国境の隔てをなくして共同して事業を行うことだと述べ、本シンポジウムの学長フォーラムと分科会を通して、有意義な討論ができることを期待すると語った。

また、本シンポジウムには海外から 17 大学・研究機関の学長・副学長・研究者が 52 名、海外在住の卒業生も参加していることの紹介があった。

2. 来賓挨拶：千葉 茂樹岩手県副知事

千葉副知事から、初めに台風 19 号で被災された方に対し哀悼の意を表したあと、本シンポジウムの開催につき祝辞を述べた。

そして、2011 年の東日本大震災津波の発災以降の岩手県の国際交流状況について紹介し、今年 9 月にはラグビーワールドカップ 2019™日本大会の試合が被災地である釜石市で開催され、多くの外国人観光客が観戦に訪れたこと、来年は東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会のホストタウン事業による事前キャンプ受入れも行われていることの紹介があった。



岩手県では今年度スタートした 10 年間の総合計画「いわて県民計画」において、岩手と世界をつなぐ人材や、地域産業の国際化に貢献する人材の育成を推進方策に掲げている。岩手大学を始めとする産学官の連携組織「いわてグローバル人材育成推進協議会」を設立し、学生の海外留学や、優秀な留学生の岩手への就職支援を実施している。将来の岩手を担う人材を育成するに当たっては、岩手大学を含め様々な主体との連携を更に強化し、優れた教育や特色ある研究の展開に、引き続き御尽力いただきたいと述べた。

3. 郭 炳善 (KUACK, Byong Sun) 群山大学長

海外参加大学・研究機関を代表して、岩手大学と学術交流・学生交流協定を締結している韓国群山大学の郭学長が祝辞を述べ、岩手大学とは課題解決研修や交換留学プログラムによる学生間の交流を通して友好関係を築いてきた、今後も学生交流等を通して互いに発展していきたいと、今後の交流活動への意気込みや期待を語った。



4. モムアムノット (MAM, Amnot) カンボジア農林水産省副大臣

本シンポジウムに参加した卒業生を代表して、修了生のモムアムノット (人文社会科学研究科 2005 年修了・連合農学研究科 2008 年修了) 副大臣が祝辞を述べ、70 周年シンポジウムに参加でき、また祝辞を賜うことは卒業生として岩手大学との関りの中で大事な 1 ページとなり、誇りに思っている、岩手大学が掲げている“Glocal”は、日本人だけでなく、外国人にも有益な考え方だと賛同の意を表した。



○Signing Ceremony of Dual Degree Program between Hanbat National University and Iwate University (ハンバット大学とデュアルディグリー覚書調印)

岩手大学とハンバット大学との交流は、1999 年からスタートして、この 20 年の間、研究交流・学生交流を着実に実施してきた。

今回は、両大学の交流実績を強化発展させる形で、岩手大学理工学研究科とハンバット大学理工学研究科の化学分野の博士課程において共同学位の教育プログラムを実施することとなり、ハンバット大学崔秉旭学長と岩手大学岩淵明学長、岩手大学理工学研究科船崎健一科長が覚書に調印した。

本覚書の特徴としては、両研究科の教員が一人の学生に対して教員指導団を組むこと、学生は両大学の授業科目を履修できること、修了した学生には両大学の学位が授与されることなどがあげられる。今後、両大学が共同学位の教育課程を通してグローバルに活躍できる博士人材を育成し、両大学の交流が一層深まることが期待されている。



○President's Forum Session 1

Creating the Future via Glocal Human Resources 大学の国際戦略とグローバルな人材育成

【以下概略】

1. 岩渕 明岩手大学長

・岩手大学の概要について

4学部からなり、4,500人の学部生、900人の大学院生が在籍している。また、230名の留学生が在籍。日本全国には86の国立大学があるが、本学は大きいわけでもなく、かといって小さいわけでもない、いわゆる中規模大学である。



・協定について

19か国の国々と54のMOUを結んでいる。ただし、アフリカと南アメリカの国々とは結んでいない。

・東日本大震災後は、地域の活動が減ってきている（人口減等が背景にある）。本学としては震災の復興ではなく、「Build back better」を目指している。

・挨拶でも述べたように、岩手大学のミッションはGlocalな大学を作っていくことであるが、この震災からの復興はLocalな問題でもあるが、Globalな問題でもある。

・学生には、積極的に海外に出てGlocalな人材（Human Resources）になってほしい。そのために、大学としては様々な取り組みを行っており、今後も積極的に実施していく。

2. 呉 連賞（WU, Lien Shang）高雄師範大学長

・大学の概要について

1954年に開学。6つの学部と2つのキャンパスからなる。



・大学運営について

優秀な人材を輩出するためには、良い教育プログラムを作ることに尽力しており、インターンシップ等を通じた産業界等との連携、MOUを政府や市とも結んでいる。

地域の課題を解決することにも力を注いでいる。Innovativeな商品を生み出すことにも力を入れており、125以上の商品を開発。これには、岩手大学の先生方にも協力いただいている。

・国際戦略について

128のMOUを結んでおり、またDual Degreeプログラムも実施しており、国際化を推進している。

・国際交流の状況について

現在800人弱の留学生がいるが、これを1,000人に増やすことを目指している。この実現に向けて、環境を整えていきたい。

3. HEIN, Sebastian ロッテンブルク大学応用森林学教授

・大学の概要について

1,150 人の学生、32 人の教授、小規模の大学である。学生の 50%が海外へ出ている。

・本大学が目指すものは、地域で解決した課題を都会より離れた地域にも波及させていくこと。

・日本とドイツの類似点と相違点について

2017 年頃、ヨーロッパはひどい干ばつにあったが、同じころ日本は大雨に悩まされていた。

同じ気候の問題でも状況は互いに異なっており、互いに学びあう姿勢が今後より重要になってくると思われる。



4. 鐘 俊生 (ZHONG, Jun Sheng) 上海海洋大学国際交流処長



・開学から 107 年の歴史について

1,200 名のスタッフ、12,000 人の学部生、3,000 人の大学院生からなる大学。教育の面でも高い評価を受けている。市政府等からの援助も受けて調査船を造船した。T-Talent, R- International Research, S- Service, T-Teacher を重要視しており、国際化もそのうちのの一つである。

・現在の国際交流の状況について

九州女子大に 28 名の優秀な学生が 2 年間留学する等、活発な人的交流が行われている。

・将来の国際交流について

今後、国際化を推進する上で、5つのタスクを掲げている。①世界のニーズにあった人材のトレーニングを行うこと。②世界の大学との交流を通して、最先端の研究を推進すること。③国際的に求められる課題を解決できる能力を持ったスタッフの育成・サポート。④マネジメントの能力を向上させること。⑤世界の水準に適した環境を整備すること。

5. YUSOFF, Ahmad Razlan パハン大学教授

・大学概要について

2002 年に開学した新しい大学。2つのキャンパスがあり、工学分野に焦点を当てている大学。14,131 名の学生がおり、22,340 名の同窓生がいる。ドイツの大学と Dual Degree の協定も持っている。

・教育について

2015 年から MOOC を使ったオンラインコ



ースを開設しており、現在 9,513 名が受講している。また、18 か国 39 カ所に Global Classroom を整備している。様々なタイプの教育体系があるというのが、本学の特徴。

・その他（本学は世界の大学ランキングのトップ 2. 6%以内に位置しており、世界からも高い評価を受けている。）

○President's Forum Session 2

University's Connection to Local Communities and International Academic Communication

大学の地域貢献のあり方と研究力アップについて

1. 藤代 博之岩手大学理事・副学長

・岩手大学には3つのサテライトオフィス（花巻、北上、奥州）があり、それぞれ市の支援を受けながら設立。また、2007年には、盛岡市の支援を受けコラボ MIU を開設し、そこでは主にインキュベーション・R&D など、産業と結びつけるコラボレーションを行っている。また、東日本大震災後に設立された釜石サテライトでは、ジョイントリサーチが活発に行われている。



・本学は4つの学部と5つのリサーチセンターがあり、地域の課題の解決に貢献してきている。中でも典型的なのが、アグリイノベーションセンターと地域防災研究センターである。

2. 崔 秉旭 (CHOI, Byoung Wook) ハンバット大学長

・大学概要について

学部生 8,768 名、大学院生 517 名、6 学部、3 大学院からなる。また、ハンバット大学のこれまでの歴史について紹介。学長は変わってきているが、大学として追求すべき理念は変わっていないということを強調。

・産学 (A (Academic) -I (Industry)) の成功例について

ハンバット大学の目標はこの分野で韓国トップに立つことを目標にしている。



。そのため、PBL (Problem Based Learning) や地域とのコラボレーション、Start-up の推奨等、学生が積極的にこのような経験をすることを重要視している。このように、産業界と積極的に関わり、社会との Platform となることが、本大学の重要なミッションだと考えている。

3. LEE, James K.W. サスカチュワン大学副学長

・これからの大学は、国際的な課題に対応するために、Internationalization (国際化) は重要だが、同時に International partnership (国際的な協力) も重要になってきている。なぜなら、現在人類が直面している諸問題は、単一の国では対応不可能なものが大多数であり、多くの国々が手を組んで諸問題に対応することが不可欠である。そして、大学はその一翼を担っている。今回のシンポジウムでも岩手大学長が述べていたようにグローバル (Thinking Globally, Acting Locally) という、考え方が大学として益々重要な考え方になってくるだろう。



また、カナダの多くの大学は国民の税金が投入されており、国民に得られた成果を還元すること、また資金をどのように使ったか等、説明する責任がある。



2-2. 11月14日(木) 13:00-17:30 分科会

1. グローバル社会で活躍するための外国語教育 【人文社会科学部・教育学部】

Foreign Language Education for Living in a Global Society

【参加者数】 96名(日本88名、韓国4名、タイ4名、)

【分科会での発表・議論の内容の総括】

前半の発表は日本語教育をテーマとし、日本語を使用言語として行われた。第一発表者のタイ国サイアム大学日本語コミュニケーション学科(以下JFC)長の高田知仁氏は、JFCのカリキュラムの特徴について説明した。タイと日本との密接な経済関係のもと、タイの日系企業は日本語のできる現地人材を求めており、JFCでは日本人とのコミュニケーション能力を重視したカリキュラムを実施していることが報告された。併せて、本学に留学中のサイアム大学の学生2名も紹介された。第二発表者は、韓国群山大学日語日文学科教授の南二淑氏であった。最近の日韓関係の課題に触れながら両国の関係の重要性が強調された後、群山大学の高い日本語教育目標が説明され、具体的に日韓語の慣用句や諺の類似点と相違点、日本語の詩作品の教材化などの指導上の工夫についても言及が行われた。



後半の発表は、英語教育政策及び英語教員養成をテーマとし、英語を使用言語として行われた。第三発表者は、バンヤピワット経営大学(以下PIM)英語教育学科長のポンピモン・プラソンボン氏であった。タイ王国の英語教育目標と目標実現のための教育政策、英語力向上のための種々の取り組みが報告され、日本の英語教育にとっても参考になる内容であった。併せて、本学に留学中のPIMの学生も紹介された。第四発表者は本学教育学部のジェームズ・ホール氏であり、本学英語教育科の卒業生と現役学生との共同発表を行った。発表題目は「問題解決のできる英語教師の育成」であった。ホール氏の報告に加えて、本学卒業生の熊谷修平氏はPIM附属中等学校での数学教育実習について報告し、現役学生の北村ちひろ氏もサイアム大学コーディネイトによるバンコク市内中等学校での教育実習をふりかえって、それぞれ自らの教師としての成長を語った。

これらの報告に加えて、ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)の各国の外国語教育での取り入れ状況について、日本語と英語を使用言語として報告者間で報告と討議が行われた。



【分科会開催の所感】

分科会で報告された取り組みは、日本・韓国・タイをめぐる関係向上に貢献していると考えられる。また、岩手大学のグローバル人材育成目標のために、分科会参加大学は協定校として連携しており、今後も協定校との交流を継続・強化することが不可欠と考えられる。

【今後の展望】

これまで PIM では数学教育実習を行ってきたが、今年度の1月から PIM と教育学部英語教育科との共同研究、学生交流も検討されることとなった。サイアム大学と岩手大学の日本語教育分野の教員交流により、今後、岩手大学の日本語教師養成とサイアム大学の日本語コミュニケーション学科との連携強化を検討されることとなった。最後に、英語教育研究の共同研究の構想が群山大学と岩手大学の教員の間で進められた。



2. SDGs の実現に向けた農学の貢献

Contribution of Agriculture Research and Education to Realization of SDGs (Sustainable Development Goals)

【参加者数】全参加者数 183 名（日本 159 名、日本以外 24 名）

【分科会での発表・議論の内容の総括】

SDGs という大きな課題について、農学が果たす役割を農学、畜産、漁業、森林また獣医という様々な視点から議論を行った。

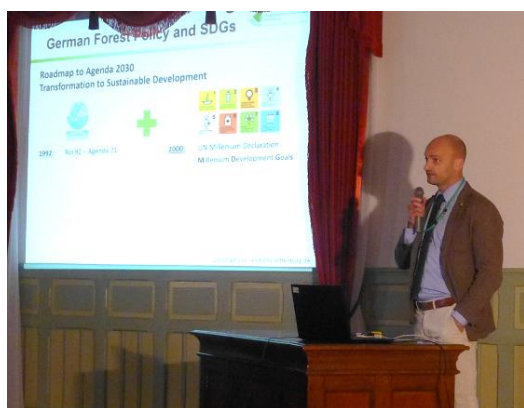
第 1 部は招待講演として、コペルニク代表の中村氏から基調講演をいただくとともに、協定を結んでいるサスカチュアン大学、ロッテンブルク大学、上海海洋大学、吉林農業大学からの発表。第 2 部は高校生の講演として釜石高校と水沢高校からの発表があり、海外からのスピーカーからの質問にも適切に回答していた。第 3 部は岩手大学農学部すべての学科教員からの発表を行い、議論を深めた。第 4 部は総合議論として持続可能性という視点から今後の方向について議論を行った。

【分科会開催の所感】

岩手大学全体と農学部で早くからこの分科会を準備し、公共施設や高校にもそれを周知できたことは、SDGs という大きな取り組みに岩手大学も取り組んでいるということをアピールでき、岩手大学のブランド力を高めることに繋がったと考えられる。

【今後の展望】

研究者同士の共同研究を進める予定。



3. 3次元計測点群処理による文化財解析 3D Measurement and Analysis of Culture Assets

【参加者数】約 30 名（国別は不明）

【分科会での発表・議論の内容の総括】

下記のように 8 件の研究発表を行った。主な内容は、3次元点群処理、文化財可視化、計測装置開発等であった。

- ・ Constructing AR Environment for Mobile Phone
- ・ Flake Surface Segmentation from Nosy Point Cloud of Stone Tools
- ・ Unfoldment of Surface Pattern with Highlighting Decoration via Rotationally Symmetric Jomon Earthenware
- ・ Dynamic 3D scanning based on optical tracking
- ・ Analyzing Shape Similarities between the Arm Model of Mongolian Buddha Statues for Archaeological Applications
- ・ Error controllable point cloud simplification with a specific simplification degree
- ・ Elaborated Face Matching of Japanese Terracotta beyond Point Cloud Registration
- ・ Constructing Adjacent Graph Between Stone Tools from Joined Material for Finding Hollow Space

【分科会開催の所感】

分科会は、岩手大、モンゴル国立大、西北農林科技大の 3 大学が持ち回りで実施している研究シンポジウムが中心となったものであり、今回で 3 回目の開催である。各大学で実施している研究内容を把握し、共同研究を拡大するための情報を得ることができた。

【今後の展望】

第 4 回 3 大学合同研究シンポジウムは、2020 年度 9 月に西北農林科技大学で開催する予定であり、今後も継続する。



4. AJS 金型鋳造分野における研究開発とグローバル人材育成

AJS (Asia Joint Symposium) for Research & Development and global human resource training in the field of Die, Mold and Casting

【参加者数】26名（中国6名、韓国1名、マレーシア1名、日本18名）

【分科会での発表・議論の内容の総括】

はじめに、本学の西村教授と平塚教授より、金型と鋳造分野における人材育成について紹介が行われた。引き続き、大連理工大学の趙教授と劉教授と李准教授、韓国ハンバット大学の金教授、マレーシアパハン大学のラズラン教授、本学の廣瀬名誉教授と内館准教授による研究発表や人材育成の取り組みに関する9件の発表が行われた。

【分科会開催の所感】

分科会では質疑応答で活発な議論があり、本会を開催したことで相互の理解と友好が深まったと感じている。また、大連理工大学からは6人中4人が初めての岩手大学訪問であり、新たな交流が生まれたことは今後にとって有意義であると思われる。本学の関連研究室から学生も参加しており、学生にとって英語での発表を聴講することは良い刺激になったものと思われる。なお、県内企業の方も2名参加された。

【今後の展望】

来年度は Asia Joint Symposium が大連理工大学で開催される見込みであり、本学の金型・鋳造の分野から数名の教員が参加する予定である。また、大学院地域創生専攻の必修科目のグローバルコミュニケーションの一環として、希望する学生を参加させることを検討する。マレーシアパハン大学については、2019年12月に本学の教員2名が訪問して講義を行うことになっており、2020年2月には岩渕学長と内館准教授が訪問を予定している。参加校とは引き続き、交流を進めて行きたい。課題としては、研究面での協力体制の構築が挙げられる。



5. AJS 起業家人材育成とビジネスプラン

AJS (Asia Joint Symposium) for Industrial, Academic and Governmental Collaboration
Entrepreneur human resources development and business plan

【参加者数】23名（中国4名、韓国10名、日本9名）

【分科会での発表・議論の内容の総括】

大連理工大学の孫紅新国際コーディネーターは、これまでのUARRの経緯の説明、国際連携の活動状況として立命館大学との交換留学生プログラム等について紹介した。ハンバット大学崔鐘仁副学長は、ベンチャー企業のアーリーステージの技術に基づく成功方策について企業経営者のリーダーシップ、アイデア、市場ニーズ、能力の重要性について紹介した。ハンバット大学禹昇翰教授は、大学と企業が協力しながら起業家教育を行うシステムとしてクロスオーバーエデュケーション（学生は企業で、企業は大学で研修するプログラム。）を紹介した。ハンバット大学金亨駿教授は、R&Dイノベーションモデルとしての韓国のLiving Labの高齢者住宅の見守りシステムや地域の伝統的市場の活性化プロジェクト等の具体例について紹介した。岩手大学千葉寿技術専門員は、産学官連携による緊急災害情報の広域警報システムの開発状況ならびにビジネスプランについて紹介した。岩手大学小野寺純治特任教授は、COCプロジェクトで進めている地域創生・起業家人材育成の取り組み状況について紹介した。

【分科会開催の所感】

本セッションでは、各大学が現在取り組んでいる学生の企業へのインターンシップによる企業教育により社会に出た際の即戦力として活躍できる人材育成に力を入れている状況を知ることができた。所感としては、企業へのインターンシップは学生への何を勉強すれば社会で活躍できそうかを知る機会であるが、それを生かして学生自身が基礎学力をさらに身に着けるとともに自身の得意分野を開拓していくところまでフォローアップする仕組みが今後は必要であると感じた。

【今後の展望】

日本、中国、韓国の3大学の新たな取り組みやその成果についての紹介はあったが、多様かつ具体的な課題点を克服された点については発表時間の関係で紹介しきれないため、各大学での課題克服事例についてのディスカッションを行う機会があるとさらに有意義なディスカッションにつながると期待している。



6. AJS 平泉と長安—東アジアにおける庭園比較史

AJS (Asia Joint Symposium) for Hiraizumi and Chang'an- Comparative History of Gardens in East Asia

【参加者数】 81 名（中国 2 名、日本 79 名）

【分科会での発表・議論の内容の総括】

①中国社会科学院考古研究所研究員 張建鋒氏

演題：「中国先秦前漢期における苑池造営の変化についての考察」

概要：新石器時代の水池から前漢期の苑池までの発掘状況を概観する上で、その立地・性格及び造営の変化についてまとめた。

②西北大学教授 王建新氏

演題：「文化遺産保護の中国的実践とその反省」

概要：中国における文化遺産保護実践の歴史過程を振り返えつつ、文化遺産保護実践の中国特色をまとめたうえで、文化遺産保護に関する権利及び「合理利用」に対する反省点を指摘した。



③岩手県文化スポーツ部文化振興課世界遺産課長 佐藤嘉広氏

演題：「平泉と苑池」

概要：最新発掘成果のもとに、世界遺産平泉の寺院における浄土庭園及びそれ以外の苑池を概観しつつ、奥州藤原氏が築こうとした仏教的浄土世界における苑池の性格について論議した。

【分科会開催の所感】

世界史的な視点から、とくに東アジアの文脈における前近代の政治都市(拠点)の成立過程及びその一連発展の系譜において、政治・行政拠点としての平泉の位置付け及びその苑池の普遍的価値を、ある程度明確化することができた。

【今後の展望】

今後、世界遺産としての平泉の新たな学術意義を確認し、世界遺産拡張登録を推進するため、東アジアにおける前近代の政治都市(拠点)の成立過程及びその構造を検討するうえで、12世紀における平泉との比較研究を行うことによって、政治・行政拠点としての平泉が、東アジアにおいて独特の位置にあることを明らかにすることが求められている。よって、UURR 枠組みのもとで、中国や韓国等の大学や考古研究所等の研究機関との交流や会合を、さらに行うことが必要である。



7. 外国人留学生同窓会設立大会・懇談会・国際交流会館見学・植樹

Inaugural Meeting of the Alumni Association for Iwate University International Students, International Alumni Round Table, International House Tour and Tree Planting

【参加者数】44名

(日本14、韓国4、カンボジア2、タイ1、中国19、マレーシア2、ロシア2)

【分科会での発表・議論の内容の総括】

岩手大学外国人留学生同窓会(以下、「同窓会」と記す。)設立大会では同窓会の設置、同窓会規約及び役員名簿について審議し参加者全員から承認を得られた。続いて同窓会会長の楊建華先生、副会長のパイリントラ先生から「同窓会設立宣言」の宣誓が日英両言語で高らかに行われ、岩渕岩手大学長から記念の盾が授与された。なお、国際交流会館敷地内に石割桜と同じ種類である「エドヒガンザクラ」を同窓会参加者全員で植樹を行い、続いて完成後間もない国際交流会館新築部分の見学を行った。

懇談会では様々な分野で活躍されている卒業生・修了生代表5名から近況や岩手大学在学中の思い出、在学生へのメッセージ、岩手大学への今後の期待等について述べていただいた。在学中の留学生からは最近の留学生会活動、中国人留学生学友会の活動紹介がなされた。

その後の懇談タイムでも、当日の参加者一人一人から岩手大学での思い出や感謝の気持ちが述べられ、卒業・修了年次、国や地域の



垣根を超え、同窓生・現役留学生・教職員相互の親睦を深め合うことができた。

【分科会開催の所感】

岩手大学創立70周年という節目に、岩手大学外国人留学生同窓会を新たに設置できたことは大きな成果であった。同窓会を土台として、本学及び在学生とのネットワークを構築し、大学及び地域社会のグローバル化と発展に貢献することが今後期待される。

【今後の展望】

既に7つ設置されている同窓会支部に加えて、同窓会設置が呼び水となり、同窓会支部が別地域にも発足されることが期待される。更に、同窓会支部毎だけではなく同窓会全体としての総会開催が見込まれる。なお、岩手大学イーハトーヴ基金に同窓会支援に関する特定基金の新設の手続きを進めているところであり、本同窓会の活動に掛かる費用として使用する予定である。



3-1. 11月15日（金） 企業・平泉・盛岡手づくり村視察

・企業視察 株式会社岩手ヤクルト工場（従業員約120名・岩手県北上市）

生産施設：成形機、充填ライン、ストレージタンク等

視察内容：オリエンテーション、生産工程見学、質疑応答

視察は二つのグループに分かれて行われ、ヤクルト工場のガイドと共に本学の教職員及び留学生が英語、中国語、韓国語で説明し、容器成形から製品が冷蔵庫に運ばれるまでの生産工程を見学した。また、日本国内で販売されている様々なヤクルト製品や、海外で販売されているヤクルトの展示コーナー、東京ヤクルトスワローズのコーナーもあり、参加した皆さんは大変興味深く見学し、帰国したら早速ヤクルトを買ってみたいという方もいた。



・平泉毛越寺・中尊寺視察

海外参加者に岩手をもっと知ってもらうため、世界遺産である毛越寺・中尊寺の見学を行った。英語・中国語・韓国語によるボランティアガイドの案内で、平安時代の浄土庭園の毛越寺、そして中尊寺では国宝の金色堂と奥州藤原氏の残した文化財が収蔵されている讚衡蔵などを見学した。毛越寺も中尊寺も紅葉がとてもきれいで、参加の皆さんには岩手の秋を楽しむ良い機会でもあった。



・盛岡手づくり村視察

視察の最後は手づくり村を訪れ、盛岡地域における伝統工芸品の作業風景の見学、南部せんべいの手焼き体験等を通して、盛岡の地場産業にも触れることができた。



3-2. 11月15日（金） 学部主催の研究交流レセプション

本シンポジウムに参加した大学・研究機関は、各学部からの提案によるもので、研究者同士の交流を深めるため、15日（金）の夕食は学部による研究交流レセプションとして企画した。交流レセプションには各学部長をはじめ、協定校の交流窓口になっている先生方や、相互の研究交流・学生交流に携わっている先生方等が参加し、有意義な交流の場となった。



【総括】

本シンポジウムのテーマである「グローバルな視点を持つ人材の育成」、「地域創生に貢献できる人材の育成」、「国際的学术交流の促進」について、参加した協定校の学長・副学長及び研究者等と闊達な意見交換ができ、それぞれの大学の先進的な取組について理解を深め、今後の課題についても情報共有できた。

さらに、本シンポジウムを通して、協定校とより強固なネットワークと友好関係を築き、今後の交流の更なる発展と継続について確認できた。

地域のグローバル化を先導することを目標と掲げている岩手大学の国際交流に対する取組を学内外および世界に発信できた。